琉球大学学術リポジトリ

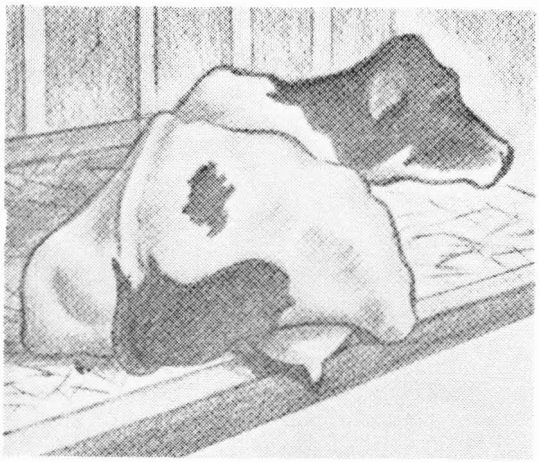
牛の乳房炎の予防と手当　（前号のつづき）

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学農家政学部
	公開日: 2011-06-23
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 宮城, 正夫
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/20648

牛の乳房炎の予防と手当

（前号のつづき）

前号で乳房炎の予防の対策として外創の予防について書いたが、数年前琉大農場の乳牛が蹄で右後乳頭を踏み付けてそこに裂創をつくった。早速手当をしたが乳頭は搾乳の際指でしめるため創口の癒着を妨げて治りを遅くした。遂にそこが化膿して其の化膿菌（ブドウ球菌）が乳頭口から侵入して乳房炎を起したことがある。乳頭の創は触るのを嫌うため、搾乳が完全になされず、乳が乳房内に停滞して乳房炎の起り易い状態にしてしまうものである。蹄で乳頭を傷つけるのを防ぐ対策としては先づ畜舎の設計で、牛一頭の牛房の広さが問題になって来る。巾1.10m、長さ1.55mをおほよその標準とするが、長さは体長によって増減がある。畜主が乳牛をそこへ入れて気付くことは、長過ぎると牛糞が糞尿溝に落ちずに後躯、特に乳房を汚し、短か過ぎると下図に示すように乳房を傷つける可能性が多いということである。

次に牛房の清潔という点で、牛房の後方は常時糞尿で汚れる可能性が多いので、少くも一日一回敷わらを取換える。それによって乳房も直接床面のコンクリート或は床板に触れずに敷わらで保護されることになる。沖縄では敷わらが入手し難いためか乳牛をコンクリート床面にぢかに寝かせている牛舎をしばしば見るが、乳房保護の面から敷わらの使用をお勧めする。

三番目に削蹄・乳牛は放牧場に出て適当に運動させると蹄は適度に磨滅して伸び過ぎということはない。牛房に入れたきりの乳牛は常に蹄の伸びに気を配って削蹄を励行する必要がある。蹄の伸び過ぎは蹄を不潔にし、遂には腐らんさせひどくなると体重の支えが不安定になり起立を嫌がる。勿論歩行も困難になって来る。特に牛房が不潔の場合は蹄の腐らんが起り易い。蹄の疾病は家畜の命取りになる場合が時にある。　（宮城正夫）